

## 創刊のことば

こころの未来研究センターは、2007年4月の設立から1年半を経た2008年11月、鴨川にかかる荒神橋のたもとに新築された京都大学稲盛財団記念館に研究の場を移すことになりました。センターのこの新しい門出を記念して、定期刊行物『こころの未来』を創刊いたします。

こころとからだ、こころときずな、こころと生き方。この3つの研究領域と、それらをつなぐ融合領域を探求のフィールドとして、センターに集う研究者は、日々多様な研究プロジェクトに取り組んでいます。この冊子には、その研究活動から生みだされた成果報告や研究論文、こころをめぐる研究エッセイ、対談など、さまざまな読みものが掲載されます。この冊子が今後未永く、こころの未来研究センターとこころに関心をもつ多くの方々をつなぐメディアとして育ってゆくことを期待しつつ、創刊のことばといたします。

こころの未来研究センター長 吉川左紀子

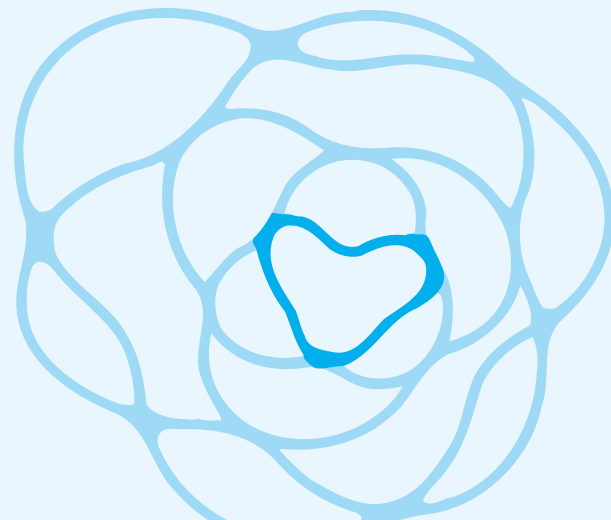
# こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER  
KYOTO UNIVERSITY

2009 vol.2

目次

創刊のことば	吉川左紀子
01 巻頭言 「情報」のこころ	五木寛之
02 対談 こころの学問は「務本の学」	松本紘+吉川左紀子
08 研究プロジェクト 発達障害の認知・感情特性と療育的関わり	久保(川合)南海子
10 研究プロジェクト 共感的対話の相互作用性 ——カウンセリング対話から「対話のなぞ」に迫る	吉川左紀子
12 研究プロジェクト こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究	鎌田東二
14 研究プロジェクト Webによるこころの研究ニュースの発信	平石界
16 論考 こころの進化と文明の発達	長谷川眞理子
22 論考 現代キーワードとしての「共生」	湯本貴和
26 論考 「依存症:溺れるこころ」を探る	松岡俊行
30 座談会 こころというブラック・ボックス	長尾真+吉川左紀子+船橋新太郎
44 論考 ロシア文化におけるこころの概念——言語文化学的分析	S.E.・ヤーチン+S.Yu. マルコワ
46 2008年度 1年の記録	
48 2008年度 仕事一覧	



# 「情報」のころ



五木寛之



HIROYUKI  
ITSUKI

情報とはなにか。最近しきりにそのことを考える。

斎藤茂吉の『万葉秀歌』（岩波新書）のなかに、有名な大伴家持の歌がでてくる。

「うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独しおもへば」

あまりにも人口に膾炙した人気ナンバーなので、引用するのちょっと気が引けるが、この歌のなかの「ころ」という字に「情」を当ててあるところがおもしろい。

万葉の歌のなかでは、「情」を「ころ」とする例がいくつもある。

「そうか、情は古代日本人のころなのか」

と、納得すると、急に情報という字がちがった感じで見えてきた。

情がころであるのならば、情報というのは、ころをコミュニケーションすることだろう。

私たちはふつう情報という言葉、乾いたデータとしてとりあつかうことが多い。資料とか、統計とか、数字とか、そんな世界に情はそぐわないのである。

しかし、情報をころのやりとりと考えると、情報社会などという未来も悪くないような気分に

なってくる。

この、気分とか、情とか、感じ、などという湿った気配の世界は、戦後ずっと一貫して知性の敵、科学の対立物のようになつかわれてきた。

抒情、情感、感傷などを追放せよ、というのが1960年代の私たち学生の命題だったのである。濡れたもの、湿ったもの世界からニルアドミラリをめざす私たち若者にとって、重工業地帯の光景をうたう小野十三郎の詩は乾きの聖典のように思われた。

しかし、実際に小野十三郎が愛誦してやまなかったのが啄木の歌、なかんずく「やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに」であったと死後に知って、慚然とせざるをえなかった。

私たちは誤読していたのである。彼は抒情を否定したのではなく、古き抒情を打ち倒し、新しき抒情をつくりだせ、と言っていたのではなかったか。

情におぼれることと、情をみつめることとはちがう。慈悲の慈は知であり、悲は情である。「情」は「ころ」であると覚悟したうえで、あらためて「情報」の重さを考えたいと思うのだ。

対談

# ころの学問は「<sup>むほん</sup>務本の学」

京都大学総長 松本 紘 + ころの未来研究センター長 吉川左紀子

「学問とは真実をめぐる人間関係である」と考える松本総長と、ころの成熟やころと学問の関係などについてお話ししました。絵本を写して読ませてくれたお母様や大学人のイメージを変えた恩師の話など、ころは人間関係の中で成熟していくことを改めて感じました。



松本 紘(まつもと・ひろし)



吉川左紀子(よしかわ・さきこ)

**吉川** ころの未来研究センターは、2009年3月で設立後2年目になり、次の年度で1つの節目を迎えます。センターができてから、当初予想していなかったようなところからいろいろな依頼や問い合わせがくるようになりました。

設立後の間もないころ、京都新聞にセンターの紹介を書いたのですが、大事な特徴は「つなぐこと」と書いた記事を読んで、近畿農政局の方がたずねて来られたんです。最初、農政担当の方がどうしてころに関心をもたれるのかと驚いたんですが、そのときに話されたのは、普及指導員という仕事のことでした。普及指導員はもともとは農業改良普及員・専門技術員として、1948年に制度ができてからずっと、農家と行政、農家と農家、あるいは農家と農業開発に携わっている人といったように、いろんな立場の人同士のところをつなぐ仕事をしてきた。でも、2004年に農業改良普及員と専門技術員が統合されたというようなこともあって、自分たちの仕事の価値が分かりにくくなってつらい立場にあるというようなお話でした。それで、農業改良普及の意義について、普及指導員の方たちに何か伝えたりアピールしてもらえないだろうか、というのです。

私は、普及指導員の仕事のことをほとんど知らなかったものですから、どんな話をしたらいいのかずいぶん心配だったんです。ところが、文化心理学を専門にしている助教の内田由紀子さんと出かけていって、コミュニケーションの心理学の話をして改良普及の実例に対する感想やコメントを伝えたと、自分たちがやってきた仕事の意義がよく分かった、とか心理学の立場から自分たちの仕事はどう見えるのかが分かってよかった、と。そうしたことをきっかけにして、現在、普及指導員の人たちが農家や農村に対してもたらした効果を心理学の方法論を応用して検証するプロジェクトを進めています。

それから、引きこもりの若い人たちが20年以上サポートしているNPO法人の方からも、自分たちの活動について学問的な目で検証してもらえないか、アドバイスをもらえないか、というお話もきています。社会とセンターとのこうした直接的な接点といますか、ころの未来研究センターに対して社会が期待しているものを今後もしっかり取り上げて、センターでの研究活動に生かしていきたいと考えています。そのためにも、できるだけ敷居の低い、オープンなセンターにしたいですね。

**松本** 外部の人と交流し、外部の人に期待されることはとても大切ですね。

私たち理系の人間も、ころには大変興味がありま

す。理学とか物理とか、一見ころとは関係ないような研究をしている人にもころの問題はあるし、彼らの研究も最終的には哲学と結びついているので、必ずどこかでころとつながっているんです。私はころについての研究手段を持たないし、哲学的に考えることもあまりできませんが、直感的に「学問とは真実をめぐる人間関係である」と思っています。

**吉川** 真実をめぐる人間関係というと……。

**松本** 人間は、個体では生きていけない弱い生物ですね。人類は進化のプロセスの中でひょこっと生まれてきた。チンパンジーが成長しそこねて、特殊な進化を遂げたのが人間ではないかという説もあるほどです。でも、人間は社会を作ることで、さまざまな生物の中で一番強くなった。それは簡単にいうと人間関係によるものです。それから、ほかの動物と若干違うと思うのは、少しでもよい方向に行きたいという向上心があること。生存競争に打ち勝ったのはそういう理由だと思います。

「関係」という言葉が、ころと深く結びついていますね。ころを悩ますのも、人との関係や社会との関係、自分のポジションでしょう。それがころの問題が生じるきっかけではないかと思うのです。生まれた時からずっと独りぼっちという実験が仮にできたとしたら、ころの問題は生まれるでしょうか。その環境の中で、自分がどう生き抜くかということでは悩むと思いますが、ころの葛藤はないはず。ところが、複数の人がいると、この人はどうだ、あの人はどうだということが基本になりますから、ころと言われる概念が発生するんじゃないか。だからころは、まさしく人の関係であると思います。

**吉川** それはご専門の学問の中で、感じてこられたことでしょうか。

**松本** 学問というより、私の性格のせいかもしれません。おぎゃあと生まれて、最初に気づくのは母親との関係で、その次が家族ですね。私は4世代家族の中で育ったので、兄弟げんかはもちろん、夫婦げんかに嫁姑問題と、社会の縮図のようなものをそこで勉強しました。小さいなりにいろんな関係を見聞きするうちに、人はどう行動するかということが自然と身についたのです。家庭の次は幼稚園、学校、それから地域社会。社会に出て職業についたら、ネットワークはすごく広がります。恋愛というファクターもありますね。そういう社会との関係で、ころは磨かれていくわけです。

そういう中で、私たちには職業としての学問があったのですが、学問をやってきて人間関係を勉強したのではなく、人間関係をもとにして学問をさせてもらったと私は思っています。非常に頭がよくて優秀な人が、

なぜか学問がうまくいかないことがあります。それは人間関係がうまくいかなかったせいだろうと私は推測するわけです。例えば、私たちは資料を調べるにもデータをとるにも、人を頼らないとやっていけません。どういう人間関係を築くかによって研究の成果は大きく変わる。社会活動がうまくいかないと何もできないというのは、人間の本質です。

**吉川** 確かにそうですね。

**松本** 論文を書く場合でも、人の論文を読んだり、議論したりしながら、自分を高めていって、人とは違うオリジナリティを出していくわけです。人と違うオリジナリティを出すということは、まさしく人間関係そのものです。

もちろん、学問というのはそういう側面だけではなくて、非常に客観的で、特に自然科学の場合はだれがやっても同じ事実を導き出せるということが重要です。だから、ころとか人間関係なんか関係ない、数式を出し、自然観察をして客観的な事実を積み上げていけばいいんだという考えもあると思いますが、私はそれにはくみしない。それはベースであって、その上に積み上がるものの大きさは人間関係で決まるのだと思うのです。

ただ、「真実をめぐる」とつけたのを忘れないでほしいんだけど、「真実をめぐる人間関係」が学問で、個人にとって一番重要なのは人との関わり、つまりころの問題ということになると私は思います。

**松本** 私たちが小さいころはみんな貧しかったから、どうしたら食べられるか、良い生活ができるか、落ち込まないか、小さいなりに考えました。同じ年代にさばけた人が多いのはそういうことがあると思っています。逆に、今の子どもが弱いのはそういう体験が乏しいからではないかという気がします。

**吉川** 家族構成が少人数になっていて、日常のほとんどの時間が母と子だけの関係ということも珍しくないといったこともあるかもしれません。

**松本** 核家族化すると、親子、夫婦という関係だけが残ります。兄弟も減ってきたので、関係といっても1対1で止まる。兄弟が5人でもいたら、おらず1つでも取り合いになって大騒ぎです。それは一種のトレーニングですよ。核家族化して子どもの数が減ってトレーニングの場がなくなるということは、ころの形成にとって大

きな問題でしょうね。

**吉川** 今日のころの問題の根の部分では、そうしたことの影響が大きいかもしれませんね。私は2人姉妹ですが、父と母はそれぞれ8人兄弟、5人兄弟の大家族でした。親の話の聞いていると、小さいころの兄弟関係だけでも相当に複雑で、社会にでたときの人間関係の原型にあたるような体験を小さいころからしていたようです。引きこもりの青年たちを社会復帰させる活動をしている方の話では、まず何をするかというと、強い父親の役割とか、怒鳴って無理やり部屋から引っ張り出すようなこともするそうです。すると不思議なことに、少しずつ気持ちがほぐれていくというお話でした。

**松本** 家族関係はいやがおうでも毎日、継続してあります。親が夫婦げんかしていても、子どもは聞いていなければならない。どっちにつこうかなと子ども心に葛藤があるわけですが、おばあちゃんが「まあまあ」と連れ出してくれたり、逃げ場もありました。今の家庭は小さくなったから逃げ場がない。結局、ネットに逃げて、人の顔の見えない会話だけが救いになっている。家族の中での継続的なころところのぶつかり合いが、ころの問題で一番重要だろうと私も思っています。

## 絵本を写して読ませてくれた母

**吉川** 松本先生は困難やトラブルを乗り越える力というか、強い意思のようなものをどんなふうにして培われたのでしょうか。

**松本** 私の父親も母親も、小学校しか出ていなかったのです。親父は貧農の次男で、電線会社の工具をしていましたが、たいへんな勉強家で、家には古本が山のようにあって、いつも本を読んでいた。私もそれを読んでいればもっと親子の会話もできたらろうと、あとから後悔しましたが。親父は45歳過ぎで教育関係の課長に抜擢され、組合の書記長、委員長をやりました。母親はわりと羽振りのいい家庭の娘でしたが、父親が女に学問はいらぬという人で、たぶん勉強はできたと思うんですが、小学校しか行かしてもらえなかった。その悔しさがずっと残っていて、その分、教育熱心でした。小学生のときから勉強にはうるさくて、先生の言うことは全部わかって当たり前。99点なんて取ったら、1点引かれたらといってえらい怒られました。風邪をひいても、母親はおんぶしてでも学校へ連れて行く。とにかく先生のおっしゃるとおりにしなければいかん、という考えでした。

**吉川** 現代の教育ママの先駆けのようですね。

**松本** 教育ママというのとはちょっと違って、中学校ぐらいまでは母親がずっと一緒に勉強をしていたんです。貧しいから本は買ってもらえなかったけど、母親がよその家から絵本を借りてきて、一所懸命自分の手で書き写して僕らに読ませていました。

**吉川** 「孟母三遷の教え」というのか……。

**松本** いやいや、そんないいものと違います。母親は負けん気が強い人で、自分が勉強できなかった悔しさを子どもにぶつけたんでしょう。これが母親が写した絵本です。

**吉川** これはすごい……。これは、なかなかできないですね。

**松本** よく描けているでしょう。いまどき、こんなことをする親はいないと思います。それから、毎日1つ自然観察をしろという宿題があったんです。たいていの子は途中でやめたけど、私はずっと毎日書きました。「ツバキを見ました」とか「オビカレハの卵を見ました」とか。母親も熱心でしたからね。その自然観察のノートも残しています。

**吉川** どちらも松本先生の宝物ですね。

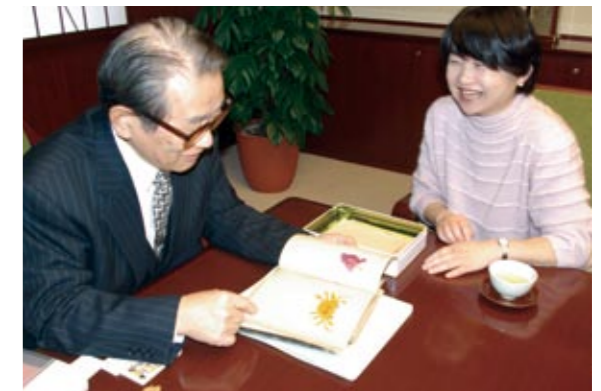
**松本** 母親の勲章みたいなものですね。そんな母親に育てられて、とにかく「真面目というの大事よ」「手抜きしたらあかんよ」とずっと言われてきた。だから、成績は小学校も中学校もよかったと思います。ほとんど100点。そうでないと怒られたから。だけど勉強は嫌いで、いつも試験の前日に覚えていました。しかも、子どものころ、野球のゲーム中に頭にバットが当たって、左目がほとんど見えなくなったんです。それで本を1時間も読めないものだから、短時間で中身を把握してしまうようなことを身につけたんだらうと思います。そういうトレーニングの結果として記憶力もよくなったのかもしれない。

私が育ったのは奈良の田舎ですから、小さなローカルな人の中でのころのやりとりや、顔色の変化を読んだり、どうしたらどうリアクションするか、どうしたらいじめられないか、子どもながらに生活の知恵が身につけていきました。それは今の私の財産になっています。だから大抵のことは何となくわかるんです。

それから、弱い人や小さい人を下に見てはいけぬというつも思っています。人間のダイナミックレンジはそんなに変わらない。

**吉川** 変わりませんか。

**松本** そう。社会的地位の高い人と、社会的地位が低くてハンディキャップを背負った人の差を大きく捉える人もいますが、私は大して変わらないと思っています。極端な例を言うと、私の息子はお産のせいで脳性



上は松本総長のお母様が子どもたちのために写して作った絵本。左は小学生のころの松本総長の絵日記。日常の様子がよく描かれている。

小児麻痺になった。話せない、座れない、食べられないのですが、40年近くずっと見てきて、私たちと変わりません。話せなくても、私が言いたいことはわかるし、ころの変化や目の輝き、喜びは同じです。そういうことを積み上げていくと、9割5分ぐらいは同じかな。社会的地位が高い人との差は、どんなに大きくても5%だと思います。

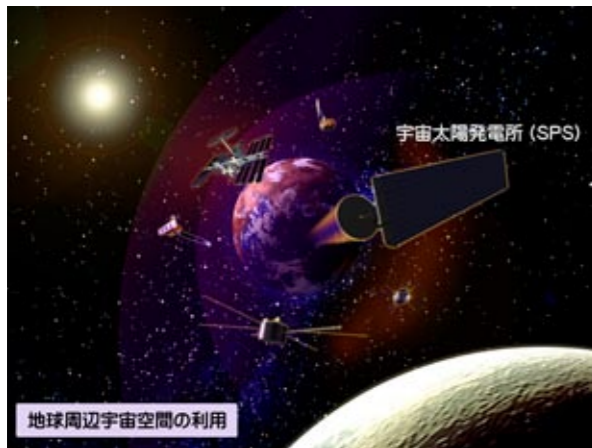
その5%を拡大して、うぬぼれたり、自慢したりするのが人間という生き物ですが、私はほとんどの人は変わらないという目線でものを見ています。だから、誰でも真面目にやっていたら、普通の社会の中に受け入れられると考えています。

**吉川** 先生は高校生のころに、これという目標を見つけられたのですか。

**松本** 格好悪いけど、高校生のころは目標なんてあまりなかったんです。京大の工学部を選んだのは、奈良の自宅から通えるの

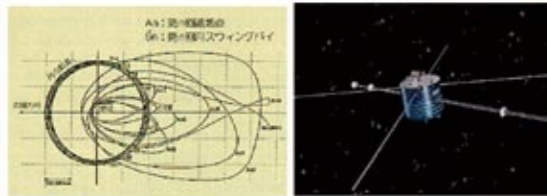
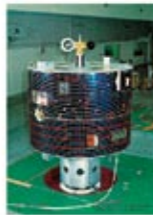
と、就職したい一心でしたからね。研究がしたいとか、学問がしたいと思ったことはなかった。性格的に何かを長時間じっくりやるのは苦手ですね。人によっては浮わついていると言われるかもしれないが、フレキシビリティが高いというふうに言ってくださる方もいます。

私の研究分野は宇宙科学だから、ものすごく広い。1つの難問を1つの方法でずっと攻めつづける人もいますが、私は性格的にそれができないので、難問に対して1つの理論で突っ込んで、解けないところに当たってアカンと思ったら、すぐ違う方法を考えるんです。理論でだめなら、地上で実験したり、人工衛星を飛ばして宇宙で実験したり、やれることは全部やってみる。それでもわからないことがあって、第3の研究方法としてコンピュータを使ったシミュレーションをやりました。今では当たり前ですが、当時はコンピュータが遅かったので、そんなことをやっている人はいなかったのです。でも、きつともっと速くなると直感してやっていると、実際にそうになりました。だから、そ



### GEOTAIL 衛星による 磁気圏プラズマ波動観測衛星

磁気圏尾部を探索する目的で我が国の衛星 Geotail は 1992 年に打ち上げられた。数々の発見を行い、世界的にもその実績を認められた衛星です。



松本総長は宇宙科学の世界で多数の国際的な研究業績を残している。たとえば、宇宙プラズマ物理学の研究分野においては、科学衛星におけるプラズマ波動観測を主導し、宇宙空間における静電孤立波を発見するなど、国際的にきわめて高い評価を得ており、宇宙プラズマ計算機シミュレーションの世界的先駆者でもある。また、宇宙で得られる太陽エネルギーを電波で地上に送電する「宇宙太陽発電衛星」の研究でも世界をリードしている。これらの功績により、紫綬褒章受章のほか、さまざまな賞が贈られている。

の宇宙プラズマのシミュレーションの分野では草分けなんです。1つの問題を解決するために、あらゆることをやってみようとする。大学運営にも難しい問題がたくさんありますが、いろんな方法をやってみようと思っています。

**吉川** それは強いですね。

**松本** 多様性のある生物は強いでしょう。人に対して、小さいころからいろんな人間を見てきましたから、怖いと思ったことがあまりないんです。政治家でも大臣でも企業家でも、誰とでも平気です。あるいは誰かに「この野郎」と言いがかりをつけられても、「なんじゃい」と平気で言い返せる。私の父親は労働組合でよく演説をしたり、人前で話したりしていましたが、「お父ちゃんは人前であがれへんの？」と聞いたら、「そんなん、いっぺんもあがったことない」と言っていま

した。私もその血をひいているのかもしれない。

## 大学人のイメージを変えた恩師

**吉川** 先生は、若い頃に、こういう人になりたいというロールモデルになるような人はいましたか。

**松本** 若いころは大学人になりたいと思ったことは、一切ありませんでした。私は毎日家庭教師のアルバイトをしていましたから、大学の先生は授業でしか知らない。だから、大学の先生というのは術学的で格好ばかりの堅物というイメージがあって、絶対になりたくないと思っていました(笑)。ところが、4回生になって卒論を書くために頻繁に先生方と接するようになりました。その時に恩師として指導していただいた前田憲一先生は、私がイメージしていた大学の先生と全然違う。若いころは「光源氏」と呼ばれていました。

**吉川** そうなんですか(笑)。

**松本** 頭が良く、人格者で、研究ができて、世界に通用する学者でした。祇園にもよく連れて行ってもらいました。とにかく人間の幅が広い。でも根は真面目で、ノートはドイツ語でびっしり書き込まれていました。

そしてもう1人感化されたのは、前田先生が電子工学の教授として連れてこられた大林辰蔵先生です。東大出身で34歳と破格に若い。建築現場の親方みたいなごっつい感じの人で、だんだん好きになりました。専門は違ったのですが、前田・大林研と2つの研究室を1つのようにしておられたので、毎日研究室に呼ばれてみっちりトレーニングされました。分厚い本や論文集を何冊も渡されて、「1週間読んできなさい」。大変でしたが、とても幅広い勉強をさせてもらいました。読んできた内容を2時間ぐらい報告すると、「よくできました。では行きましょう」と言って、いつも先斗町に連れて行ってくれました。そこで聞く話がものすごい。肝が据わった先生で、世界的な学者だったんです。スペースシャトルを日本に最初に紹介した人です。直接の恩師ではなかったのに、その後もずっとかわいがってもらいました。20年くらい前に亡くなりましたが、形見にこのメガネをもらいました。

**吉川** 京都大学に、ころの未来研究センターのようなユニークな場所があることを最大限生かせるような仕組みはできないかなと思っているのですが……。

ころはどこにあるのか

**松本** 今、京都データ集を作ってもらっているのですが、京都は稲盛和夫さんを筆頭に、ころに対して理解ある文化人や実業家がたくさんいますね。京都の文化、日本文化ところは切り離せないでしょう。京都は大学の町と言われますが、大学が何校ぐらいあると思いますか。

**吉川** 50校ぐらいでしょうか。

**松本** そう。大学は国立大学法人が3校、公立が3校、私立が25校。短期大学が公立は1校、私立が15校。こんなに多いと思いませんでした。神社やお寺はどれぐらいあると思いますか。

**吉川** 何百とありそうですね。

**松本** これはなかなかつかめないんですが、ざっと調べたところ、京都市では神社が404、お寺が1,680。それからお茶、お花、能、狂言などもあります。その背景にあるのはころですね。京都には精神文化もあれば物質文化もあります。

京都大学にころの未来研究センターという、ころの研究拠点ができうれしく思っています。私はころというのは脳作用と思っているけれど、ころが痛むとき、キュッとするのは胸でしょう。ころがどこにあるかという、丹田にあるという人もいれば、胸にあるという人もいます。最近、つくづく思うのですが、手でつかんだり、物を食べたりする感覚は、手や舌でそれぞれわかりますね。脳は非常にたくさんのことをやっているのに、脳自体は自分が働いているというシグナルを発生しませんよね。ころという、どうしても脳はイメージしない。やはり胸だと思いませんか。

**吉川** そうですね。「心」という漢字は心臓の形をあらわすそうです。

**松本** そうですか。でも、「ころ」は何かもう少し広い感じがしますね。仏教に「眼・耳・鼻・舌・身・意」とある。「眼・耳・鼻・舌・身」は五感で、最後の「意」は第六感といわれるものですが、これがころと関係しているんです。五感をすべて支配する「意」というものがある。「意」は現代風にいうと、脳的作用です。これが「ころ」ということになると思うのです。大昔から「無」とか「空」と「ころ」の関わりについて考えている人がいますが、そういう哲学的、感覚的なころの定義と、もう1つ、非常に物理的、生理的なころというものがある。こちらはお医者さんたちが手を出している分野です。

## ころの学問は「務本の学」

**松本** 哲学関係の人はころにあまり関心を持ちませ

んか。

**吉川** 関心を持たないことはないと思いますけれども、学問としての哲学という、今は文献学が中心になっているような気がします。ころ観というか、「ころとはなにか、ころをどう見るのか」というような問いにはあまり関心が向かないかもしれません。

**松本** 本来の学問は、形がまだないところからスタートするのが醍醐味であり、自由性があると思っっているのですが、非常に歴史の古い学問は石積みをずっとやってきて、1人の研究者が一生をかけて1つの石を積み上げると、次の人がまた石を積み上げる。だから過去にやった人の論文を全部読むわけです。そういう人が碩学といわれる。しかし、それをやり過ぎると知識に縛られるという面がある。「記問の学は以て人の師たるに足らず」(礼記)という言葉があるように、文献を読んで博識だからといって、先生とするには足りない。ころの場合は、これから学問の本質を切り拓くという面白さがある。これはとてもいいですね。

京都大学は、枝葉末節ではなく「本を務むの学」であってほしい。大本をしっかりとやってほしいんです。ころの学問は大本の学問だと私は思います。それを「務本の学」というんです。「本を務むるの学」は非常に重要で、物の本質をずっと考えるということが、京都大学の強みだと思う。

今回のノーベル賞も、物質の大本は何かということ突き詰めて、物質と反物質の矛盾点を1つ提案したのが、小林・益川理論でした。多くの研究は細かくなりすぎて、本来どういう問題を解いているのかを忘れてしまうような傾向がないとはいえない。だから、ころの未来研究センターは「務本の学」をぜひ目指してほしい。なぜ私たちにはころがあるのかという哲学にもつながるので、哲学者はころをどうみているかということもたいへん興味があります。

**吉川** ありがとうございます。大学の現状をよく知る人から、「今の時代に、こんなセンターができたこと自体が奇跡に近い」と言われます。ころの未来研究センターで取り組む研究がまさに「務本の学」となるように、努めてゆきたいと思っています。

**松本** ころの学問、「ころ学」というのがあるかどうか知りませんが、ころの未来研究センターの究極の目標として、京都発、京大発のころ学の学会のようなものをうまくつくられるといいと思います。

**吉川** 本日はどうもありがとうございました。

(2008年12月24日、京都大学総長室にて)